

## 《私の授業》

# 「初年次ゼミ」における教育プログラムの例示

大 倉 真 人

## 1. 大学と高等学校との接続

日本の学制(例えば「6・3・3・4制」)の観点から概観した場合、高等学校を卒業した次に大学に入学するという意味において、高等学校と大学との間には接続性がある、あるいは隣接関係にあると言えるかもしれない。しかしながら同時に、このような見解は、「高等学校のすぐ上は大学」といったような日本の教育システム上における並び・位置関係を表現したに過ぎず、高等学校と大学という教育機関の性格上の違いを無視した理解と言えるかもしれない。実際に、高等学校と大学との違いは多岐にわたると思われるが、本資料での後の議論に関連する事項として、以下の2つが挙げられる。

1つめは、大学が、設置されている学部・学科等にかかる専門知識を学ぶ場であるという点である。経済学部だと、経済学を中心に隣接学問分野である経営学・商学などを学ぶことを主たる目的としている。また文学部英文学科であれば、英文学や英語学を学んだり研究したりするための学習プログラムが提供されている。換言すれば、大学は、高等学校以前で学習する英語・数学・国語のような一般的・普遍的な知識の修得を少なくとも主たる目的としては提示しておらず、それら一般的・普遍的な知識を前提とした専門的な知識の教授を目的にしていると解釈できる。

2つめは、大学が、「答えのない問題」について学習する場となることが少なくないという点である。高等学校以前においては、答えのある問題、場合によっては「択一式で解答が必ず1つしか存在しない問題」に直面するケースが少なくない。それに対して大学では、「〇〇についての自身の見解を述べなさい」などのように、見解の内容について優劣を付けることは可能であったとしても、直ちに正解・不正解が明確に区別できるとは限らない問題に取り組ませることが少なくない。さらには、卒業論文の執筆を卒業要件としている大学・学部も少なくないが、言うまでもなく、卒業論文に決まった正解・不正解は存在しない。

上で述べた2つの点を4月に入学した大学生(大学1年生)の視点から見ると、大学とは、「これまで(=高等学校まで)に学習したことのない科目(=専門科目)について学び、自分の見解(=明確な解答のない問題に対する自身の答え)を考えて述べる」場所となる。そして、このような差異は、高等学校と大学が異なる設置目的・教育目標等を有しているため生じている。それゆえに、このような差異が存在すること「自体」を問題視することは適切ではなく、大学に入学した学生自身によって、学習方法などの転換が図られなければならないとも言える。

しかしながら、全ての学生がこのような学習方法などの転換をスムーズに行えるとは限らない。学生によっては、こうした差異を「大きな(断絶した・埋めがたい)ギャップ」と感じ・戸惑

うかもしれない、さらには、転換が上手くいかないことを原因に、大学の授業についていけなくなる可能性がある。また、大学が一部の限られた者のみ通う場ではなく、多数の者に門戸を開く場に変遷しているという事実が、この転換にかかる問題をより深刻化させているかもしれない。実際、2014年度における過年度卒を含んだ大学・短大進学率は56.7%である<sup>1)</sup>。それに対して、一例として、第2次ベビーブーム世代に含まれる1973年生まれの筆者が大学に入学した1992年度を例にとると、大学・短大進学率(過年度卒含む)は38.9%である<sup>2)</sup>。これに加えて、受験者総数が大学の学生定員総数を下回るいわゆる「大学全入時代」が近未来的に到来することが予想されていることもあり、「どのようにしてスムーズな転換を実現するか」という問題は各大学における重要な課題の1つになっているように思われる。

実際、多くの大学では、大学に入学して最初の学期である1年生春学期(前期)において、大学における学習の方法等を学ぶ場としての演習科目としての初年次ゼミを配置しているケースが多く、またそれが必須科目として設けられているケースも少なくない。

## 2. 教員の専門性と初年次ゼミ

大学における全ての教員は、それぞれの専門分野を有しており、その専門分野に即した教育・研究を行うことをメインとしている。換言すれば、大学教員は、原則として、「初年次ゼミ」を主たる教育・専門分野として掲げている訳でない<sup>3)</sup>。大学教員の募集(公募)を見ると、主題には「〇〇論担当者募集」のように、特定の専門科目に関する授業担当が可能な者を募集する形式で書かれている。その結果、その当該専門分野にかかる知識・経験・研究業績などが優れている者が選ばれることになる。しかしながら、専門分野において優れていることと初年次ゼミの運営に優れていることは必ずしも一致するとは限らない。

また、実際に初年次ゼミの担当者となった場合、各回の授業内容をどのようにするかという点で戸惑う場合が少なくない。半期2単位15回授業の初年次ゼミを考えた場合、「初回は自己紹介をさせて、2回目は図書館ガイダンスをして、3回目はコンピューターガイダンスをして…さてその後(残り12回)はどうしよう？」などのようになってしまうケースも少なくないように思われる。自身の専門領域に関する授業であれば、自分が知っている良書をテキストとした上で、それに従って講義計画を立案すれば良いかもしれない。あるいは、分野によってはすでにその分野を教えるための教育体系が確立しており、その教育体系に従った授業計画を設定すれば良いかもしれない。しかしながら、初年次ゼミの場合、各教員の専門領域でないこともあり、適切なテキストを選定するための十分な知識があるとは限らない。また、初年次ゼミの運営については、大学・学部の違い、クラスサイズの違い、大学・学部が要求している事柄の有無および内容(例えば、コンピューターリテラシーにかかる説明を行うことが大学共通ルールとして定められている場合など)などによっても大きく異なることから、確立した教育体系を樹立することは困難であると言わざるを得ない。

なお、このような初年次ゼミを含む初年次教育に関する先行研究は、この問題にかかる重要度に関連して、多数存在する。例えば、石倉他(2008)および山田(2009)は、日本およびアメリカにおける初年次教育の展開過程および現状について議論している。日本学生支援機構(編)

『大学と学生』は、過去2回において初年次教育に関する特集号(第54号(平成20年5月号)における「初年次教育」、第80号(平成22年5月号)における「新入生への修学支援—初年次教育—」)を組んでいる。そしてこれらの特集号においては、初年次教育そのものについての論説だけでなく、実際の取り組み事例も紹介されている。また、自身が所属する大学・学部等での初年次教育の取り組み事例を示したものとして、澤田他(2010)、中山他(2010)、大倉(2014)などがあげられる<sup>4)</sup>。さらに、特定の科目・分野に関する初年度教育にかかる議論をメインとしたものとして、情報リテラシー教育に焦点を当てた安藤(2004)や英語教育について述べた津村・居村(2015)などがあげられる。

このように、初年次教育の取り組み事例を概観した先行研究は少なくない。そしてこれらの研究は、「このような初年次教育の運営方法がある」ということを示すことを通じて、先に述べたような初年次ゼミを運営する際の「戸惑い」を軽減・除去することにつながると考えられる。実際、各大学・学部においては、初年次ゼミの運営方法について、「ケース」としてファカルティ・ディベロップメント(FD)などの場を通じて紹介されたり、学内における教育関連のサポートを目的としたセンター等が刊行する冊子等に掲載されたりする場合が散見される。

以上の背景を基礎に、本資料は、筆者が2015年度春学期に担当した初年次ゼミでの取り組みについて、実施の1つの例として示すことを主たる目的とするものである。

### 3. 実施内容

#### 3.1 実施内容の概略

筆者が2015年度に担当した初年次ゼミの授業計画については、以下の(表1)のとおりである。なおこの(表1)に示した授業計画は、初年次ゼミの第1回目の授業において、筆者が担当する初年次ゼミの履修学生(以下「ゼミ生」と呼称する)に配布したプリントに示したものである。また、休講なしでこの授業計画どおりに実施できたことから、(表1)は、授業計画であると同時に

表1 授業計画

日時	内容(概要)
4/15	オリエンテーション、自己紹介など
4/22	文献検索および引用・参考文献の掲載方法について(解説)&プレゼン実演
5/ 6	図書館オリエンテーション
5/13	プレゼンテーション(1回目)①
5/20	プレゼンテーション(1回目)②
5/27	プレゼンテーション(1回目)③
6/ 3	プレゼンテーション(1回目)④
6/10	グループ討論・発表①
6/17	グループ討論・発表②
6/24	グループ討論・発表③
7/ 1	プレゼンテーション(2回目)①
7/ 8	プレゼンテーション(2回目)②
7/15	プレゼンテーション(2回目)③
7/22	プレゼンテーション(2回目)④
7/29	まとめ

に授業実施記録でもある。

(表1)より明らかなように、全15回の授業は、プレゼンテーション(第4回～第7回および第11回～第14回)と「グループ討論・発表」(第8回～第10回)の2つを主軸課題とする構成になっている。よって以下では、それぞれについて詳述していく。

### 3.2 プレゼンテーションについて

第1回目の授業で配布したプリントにおける説明をそのまま引用すれば、以下のとおりである。

プレゼンテーションについて(2回)：

以下の方法により行います。

- 各回5人または4人(順番については第1回目の授業で決定する)が発表
- プレゼンタイトルは「〇〇の魅力を大いにプレゼンする!!」とします。なお「〇〇」は何でも良いものとします(例：阪神タイガース、ワンピース、銀閣寺…(本当に何でも良いです))。
- プレゼン時間は10分とします。
- パワーポイントを使ってください(パソコンはこちらで準備しますので、USBにパワーポイントデータを入れて持参してください)。ただし、朗読原稿の持ち込みは禁止としますので、自分の言葉で語ってください！

その上で、上で述べていない事項(補足説明およびねらいや目的など)を説明すれば、以下のようになる。

入学して間もない1年生は、高等学校と異なる大学の授業に慣れること(例えば90分授業に慣れること)や、大学生としての生活に順応することに少なくない労力・時間等を要すると考えられる。それゆえ、プレゼンテーション課題を与える際には、その発表準備に十分な時間が確保できるようなスケジュールを組むことにした。具体的には、プレゼンテーション課題のスタートをゴールデンウィーク後に設定した(4月29日が昭和の日で休日となっている点を利用した)。またこれまで大学でのプレゼンテーション経験がない1年生からすると、プレゼンテーションがどのようなものであるのかが想像しにくいかもしれない。この点を考慮すべく、1つの例示として、担当教員(筆者)によるプレゼンテーションの実演を行った((表1)における第2回の「プレゼン実演」がこれに相当する)。

また「〇〇の魅力を大いにプレゼンする!!」として、自分の好きなこと・得意なこと・多くの知識を有していること等についてプレゼンテーションさせた理由は、以下の2つに集約される。

1つめは、「パワーポイントを使ってみんなの前でプレゼンテーションすること」自体に重点を置くこととし、それゆえに各ゼミ生にとって調べやすいテーマを課題として与えることが望ましいと判断したためである。またこのような形式で課題を与えることで、発表の準備を楽

表2 プレゼンテーションのタイトル

学生	1 回目	2 回目
1	ひらかたパークの魅力	Victoria's secret
2	百円ショップの魅力について	京都について
3	ディズニーランドのあれこれ	in Kobe
4	ドラゴンボールの魅力について	酵素風呂のススメ★★
5	Disney キャラクター	☆STAR☆BUCKS
6	EXILE	ワンピース
7	台湾の魅力	私のふるさとー岡山県ー
8	福岡の魅力	Perfume の魅力
9	ムーミンの魅力	宇治について
10	チロルチョコの魅力	人狼の魅力
11	nanoblock	情報企画科の魅力
12	名駅の魅力について紹介する！	Châteraisé の魅力
13	梅干しの魅力について	ハワイの魅力について
14	ディズニーの魅力	うさぎの魅力
15	vivi モデルの魅力	カルビーについて
16	ユニバーサル・スタジオ・ジャパン	♡韓国スキンケア♡
17	ジブリの魅力	不二家について
18	バドミントンの魅力	アイスの魅力

しく行うことができ、それによって大学生活における勉学意欲を喚起することができるとも考えたためである。

2 つめは、発表するゼミ生も発表を聞く他のゼミ生も同じ1年生であることから、好きなことと得意なことには少なからず共通点・共感点があると思われたためである。そして共通・共感できる話題でのプレゼンテーションは、議論や質問の活性化につながるのではないかと考えたためである。

なお、筆者が2015年度春学期に担当した初年度ゼミ生数は18名であった。そして、各ゼミ生が実際に行ったプレゼンテーションのタイトルを示せば、(表2)のようになる。ただし、ゼミ生の匿名性を確保することを理由に、表中では、ゼミ生18名を学生1～学生18と呼称している。

なお、本プレゼンテーションの実施を通じて、観察された事項について列記すれば、以下のようになる。ただし、列記した順序はその重要性・インパクト等の高低を示すものではない。

- 1 回目のプレゼンテーションでは、持ち時間の10分を大幅に下回る時間で発表を終えてしまうゼミ生が少なからず出現した。それに対して、2 回目のプレゼンテーションでは、持ち時間の10分をきっちり使うゼミ生が多数となり、中には自分の好きなテーマを発表していたこともあってか、発表時間である10分を大幅に上回る時間(20分超)の発表となったゼミ生も出現した。
- 自分の好きなことをプレゼンテーションするということもあり、多くのゼミ生はメモなどを棒読みするなどなく、自分の言葉でしっかりとプレゼンテーションしていた。また1 回目はメモなどを見がちだったゼミ生も、2 回目には、クラスの雰囲気慣れてきたことなども寄与したためか、よりリラックスした状態で発表をしていたように思われた。
- このようなプレゼンテーションの経験が(ほとんど)ないためか、コンピュータにかかる極め



て基本的な知識(パワーポイントでのスライドショーのスタート方法、USB メモリースティックの抜き方など)を有していない(極めて乏しい)ゼミ生が少なからず存在した。

- プレゼンテーション後の質問の時間では、どちらかと言えば、特定の決まったゼミ生からの質問が目立った。換言すれば、「質問する(ことのできる)ゼミ生」と「そうでないゼミ生」との格差が目立った。
- これはどのようなスタイルのプレゼンテーションにおいても言えることかもしれないが、ゼミ生全体の興味に密接に合致するテーマであった場合において、発表が特に盛り上がる傾向にあった。一例として、「百円ショップの魅力について」の発表の中で、100円ショップで売られているマニキュアを落とす除光液についての説明があったが、その説明に関して、聞いているゼミ生から高い関心が寄せられていた。このことは、各ゼミ生がマニキュアをきれいかつ簡単に落とせない経験・不満を持っていて、それゆえに「きれいかつ簡単にマニキュアを落とすことができる除光液」の話は興味深いものに映ったのではないかと思われる。

### 3.3 グループ討論・発表について

第1回目の授業で配布したプリントにおける説明をそのまま引用すれば、以下のとおりである。

グループ討論・発表について(3回)：

以下の方法により行います。

- くじにより、6人×3グループを作ります(グループメンバーは毎回変えます(各回の授業始めにくじ引きをして決めます))。
- 各グループに「議論する問題」を与えます。
- その問題について各グループで40分間自由に議論してもらいます。
- 各グループがその議論した内容をプレゼンテーションします(各グループ10分)。

各グループのために用意した「議論する(した)問題」は次ページの(表3)のとおりである(ただし本資料への掲載にあたり一部改訂)。なお、問題番号の横に書かれている「1A」から「3C」までの表記は、例えば「2B」であれば、グループ討論・発表第2回目の授業でB班に割り当てられた問題内容であることを示している。よって表記のない問題は、実際の授業では使われなかったことを示している(「3回×3グループ=9つの問題」となることから、実際に使われなかった問題が存在する)。

なお、このような課題を設定した理由は、以下の2点に集約できる。

1つめは、大学で学習を進めていく中で出てくるであろう「グループワーク」を体験させておきたいと考えたためである。そして、このようなグループワークは、自分の長所・短所を知るきっかけを与えるとともに、他のゼミ生の異なる意見・考え方・思考等に触れる良き機会になると考えたためである。

2つめは、授業日当日にグループ分けを行い、また同じく授業日当日に議論する問題を与え

表3 議論する(した)問題の一覧

問題番号	問 題 内 容
1(B3)	女性の社会進出を進めるためにはどうすればよいか？
2	原子力発電所の再稼働あるいは廃止はどうすればよいか？
3(B1)	自動車や飛行機等の事故をなくすためにはどうすればよいか？
4(C3)	少子化社会の到来にどのように対応すればよいか？
5	高齢化社会の到来にどのように対応すればよいか？
6(C2)	東京オリンピックを成功させるためにはどのようにすればよいか？
7(B2)	東日本大震災の復興は今後どのように行っていけばよいか？
8(A3)	日本経済を良くするためには、どのようにすればよいか？
9	今後消費税はどのようにすべきであると考えるか？
10(C1)	今後就職活動はどのように行われるべきであると考えるか？
11(A1)	この大学をより一層活性化するためには、どうすればよいと考えるか？
12(A2)	貧困・戦争などに対して、日本はどのように国際協力していくべきと考えるか？
13	政治・経済などで起こる汚職をなくすためには、どうすればよいと考えるか？
14	動物を愛護するためには、どうすればよいと考えるか？

る方式を採用することで、事前準備がほとんどできない状況下での対応力を学ぶ良き機会となるのではないかと考えたためである。

また上で述べたように、40分間の議論の後、各グループで10分間のプレゼンテーションをしてもらったが、そのプレゼンテーションにかかるルールとしては、絶対に10分間プレゼンテーションする(よって、準備不足等を理由に話す内容がなくなっても10分間実施することおよび全員でプレゼンテーションを実施する(よって、6人の中から代表者を選んで発表することは不可とする)ことの2つのみとした。換言すれば、この2つのルールを守りさえすれば、どのようなスタイルでプレゼンテーションを行ってもよいとした。このようなルールの設定方法は、全員が発表に関与することを要求するものであると同時に、各グループにおけるプレゼンテーション上の創意工夫を最大限に尊重することを狙いとしている。

なおグループ討論・発表を通じて、観察された事項について列記すれば、以下のようになる。ただし先ほどと同様に、列記した順序はその重要性・インパクト等の高低を示すものではない。

- 40分間の議論をどのように行ったかについては、各自・各グループで様々であった。例えば、ゼミ生同士でそのテーマについて意見を出し合うというオーソドックスな方法が見られた一方で、自分のスマートフォンを使って議論すべき内容についてネット検索しているゼミ生も見られた。
- 議論の進め方についても各グループで様々であった。1つの例として、あるグループでは、出された問題の内容を2つのサブテーマに分け、そのサブテーマを3人ずつで議論するというスタイルを採用していた。また別のグループでは、議長(のような立場の者)を設けた上で、そのゼミ生の指揮の下で議論を行っていた。
- 1回目のプレゼンテーションでは、プレゼンテーションにかかる計画立案が未熟だったこと等により、持ち時間の10分間を上手く使えないグループが出現した。しかしその反省もあってか、2回目以降では、40分間の議論の時間の終わりが近づくと、その後に控えているプレゼンテーションの進行や時間配分等について考え始めるようになった。



写真 ゼミの教室における机

・プレゼンテーションの「方法そのもの」について制約を設けなかったことから、より内容を分かりやすく理解してもらうことを目的に「寸劇」を交えたプレゼンテーションを行ったり、質問を出して意見を聞くスタイルを採用したりするグループが出現した。さらに、発表内容に関連した写真を提示するために、発表時間内において、ゼミのグループラインに画像を送信して見てもらう工夫を行ったグループも存在した。

また、特筆すべき点として、ゼミ教室に配置されていた机が(写真)のような形状のものであったことがあげられる。このグループ討論・発表の存在を意識して教室割当にかかる依頼を行った訳ではなく、その意味において偶然と呼ぶべき事項ではあるが、この机の形状は、同じグループとなった6名が集まって議論するに際して極めて適切であったものと推測される。

#### 4. おわりに

本資料では、筆者が2015年度春学期に担当した初年次ゼミでの取り組みについて、実施の1つの例として示した。初年次ゼミは、大学に入学した1年生の「学びの入口」であり、重要性を包含した授業であると理解することができる。そしてその意味において、初年次ゼミを実施する際には、受講したゼミ生の大学における今後の学びを助けるものとなることに注意を払う必要がある。

しかしながら、本資料中で述べたように、大学教員は、原則として、初年次ゼミを主たる教育・専門分野として掲げている訳でなく、初年次ゼミの運営にかかる専門的知識・経験を十分に有している訳ではない。それゆえに、より望ましい初年次ゼミを実現するためには、具体的に実施された事例等を示すことが1つの方法となると考えられ、その意味において本資料は少なくない意義を有するものと思われる。

#### 注

- 1) 文部科学省「学校基本調査—平成26年度(速報)結果の概要—」を参照。



- 2) 文部科学省「文部統計要覧(平成20年版)」を参照。
- 3) 例えば、寺田(2012, 259ページ)は、「初年次教育においては担当教員全員がこの科目の専門家であるわけではない」と述べている。
- 4) ただしこのうち澤田他(2010)は6名の筆者によって執筆されているが、筆者群のうちの1名は他大学の所属となっている。

#### 参考文献一覧

- 安藤友張(2004)「学士課程における初年次教育と情報リテラシー教育」『大学と教育』第37号, pp.29-47。
- 石倉健二・高島恭子・原田奈津子・山岸利次(2008)「ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題」『長崎国際大学論叢』第8巻, pp.167-177。
- 大倉真人(2014)「『社会人基礎力』育成のための教育プログラム―「ゆるキャラ作成」を題材として―」『経営と経済』第94巻, 第1・2号, pp.41-56。
- 澤田忠幸・鳥居順子・草薙康城・加藤徳雄・木下誠一・鈴木光代(2010)「愛媛県立医療技術大学における初年次教育の取り組みと課題」『愛媛県立医療技術大学紀要』第7巻第1号, pp.29-35。
- 津田晶子・居村俊子(2015)「英語基礎学力向上のための高大連携：現状と課題」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第47号, pp.25-30。
- 寺田己保子(2012)「初年次教育についての一考察」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』第12号, pp.259-266。
- 中山留美子・長濱文与・中島誠・中西良文・南学(2010)「大学教育目標の達成を目指す全学的初年次教育の導入」『京都大学高等教育研究』第16号, pp.37-48。
- 山田礼子(2009)「大学における初年次教育の展開―アメリカと日本」『Journal of Quality Education』Vol.2, pp.157-174。
- 日本学生支援機構(編)『大学と学生』第54号(平成20年5月号)および第80号(平成22年5月号)：  
[http://www.jasso.go.jp/gakusei\\_plan/dtog0805.html](http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/dtog0805.html)(2015年12月23日閲覧)  
[http://www.jasso.go.jp/gakusei\\_plan/dtog1005.html](http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/dtog1005.html)(2015年12月23日閲覧)
- 文部科学省「学校基本調査―平成26年度(速報)結果の概要―」：  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/26/08/attach/1350731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/attach/1350731.htm)(2015年12月23日閲覧)
- 文部科学省「文部統計要覧(平成20年版)」：  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/mokuji20.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/mokuji20.htm)(2015年12月23日閲覧)

**Keywords**：初年次ゼミ，高大接続教育，プレゼンテーション，グループ討論